

佳作

優しかった。

広島県 広島市立宇品中学校三年 佐藤 琴美

小学三年生のある土曜日の午後、私は交通事故に遭ってしまいました。

自宅近くの道路で、友達とふざけながら自転車に乗っていたところ、車と衝突し、足を打ってしまいました。父が駆けつけて救急車を呼び、救急車の中で病院を探してもらっていました。ところが、土曜日ということで病院が開いていないところが多く、どこの病院にも受け入れてもらえませんでした。救急車の中で一時間くらい経っても病院が見つからず、「このまま、どこの病院にも行けなかったらどうしよう」と不安になってきました。私の顔を見た救急隊員の方は、

「大丈夫。絶対、病院を見つけるからね。」
と、優しく言ってくれたので、私はとても安心しました。

しかし、だんだん太ももが腫れてきて、痛みが増してきました。けれど、まだ受け入れてくれる病院が見つかりません。仕方がないので、かかりつけの病院へ電話し、骨が折れているかどうかだけでも知りたいので、レントゲンを撮ってもらえないかと聞いてもらいました。かかりつけの病院で診てもらえることになり、ようやく救急車が発発することができました。

かかりつけの病院に到着したとき、いつも私をかわいがってくれる看護師さんが当直でした。運ばれてきた私を見て、

「ことちゃん、電話で名前を聞いてびっくりしたよ。」

と言ってくれたときは、ほっとして涙が出そうになりました。私は、足がズキズキしてとても痛かったので、レントゲン台に移動することすら無理だと思っていました。救急隊員の方が優しく私の足を持ち、そっとゆっくり上手に移動してくれたので、痛みはそれほど感じませんでした。

レントゲンを撮った結果、やはり大腿骨が折れていました。すぐに入院先の病院を紹介してもらい、救急車で移動しました。そのときも救急隊員の方は、

「足に振動が伝わらないようにゆっくり走るからね。」
とか、

「段差があったら、よけて運転するからね。」
と言ってくれました。

普段は外からでしか見ることのない救急車ですが、救急車の中では救急隊員の方がこんなにも優しく対応してくれていることを知りうれしい気持ちと感謝でいっぱいになりました。

その後、私は三カ月間、車椅子とリハビリの入院生活を経て、傷跡が残ったものの、無事日常生活に戻ることができました。

今でも救急車を見る度に、あのときの優しかった救急隊員の方を思い出します。